

芸術新潮

Geijutsu Shincho

May 2019 5

|特集|

東 寺

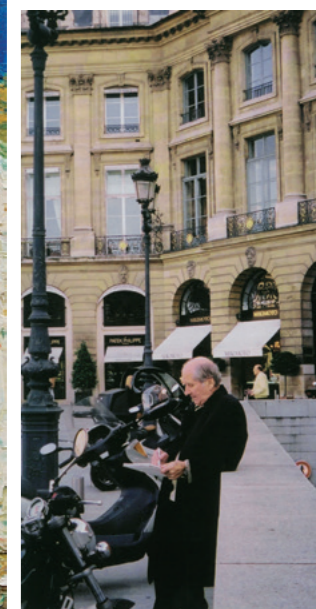
オール アバウト

第2特集

追悼 橋本治

文 大島弓子 山岸凉子 ほか

André Cottavoz
1922-2012



右/パリ、ヴァンドーム広場でスケッチするコタボ。
左/アンドレ・コタボ《海辺のフルーツ》
油彩、カンヴァス 114×146cm



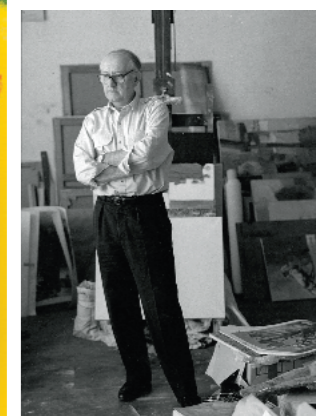
コタボ&ギアマン 共に歩んだ画商が語る画家たちの素顔

芸術新潮
特別企画



Paul Guiramand
1926-2007

下/ギアマン、アトリエにて。
左/ポール・ギアマン《小鳥とブーケ》
油彩、カンヴァス 60×73cm



コタボを撮った写真の中に、踏み台に上がって特大のカンヴァス(270×450センチ!)と格闘するシーンがあった。描いているのは真っ白に雪をかぶった富士山。1990年、3カ月ほど日本に滞在したコタボが、ギャルリーためながの爲永清司社長(現会長)宅の一室をアトリエにして制作に励んだ時のひとコマだという。「富士山を描くように勧めたのは私ですが、フランス人には富士山という北斎のイメージがあるでしょう。だけどそれでは困る。私は富士山の分量、ボリュウムを描いてほしかった。ですから何度かヘリコプターに乗せて富士山を上から見せたいですよ」ボリュウムを感じとらせたいにしてもヘリまで飛ばすとは豪快だが、その思いつきはあるいはコタボが厚塗りの画家(それも途方もない程の)だったところから生まれたのかもしれない。

「通常の3倍は絵具を使いますね。筆では追いつかないから基本的にナイフを使う。だから半ば彫刻家的なところもありました」厚塗りに由来するレリーフめいたマティエールの面白さはコタボのどの絵にも共通するが、「カフェ・ロトンド」(2)はそれが極限にまで進んだ例のひとつ。画面下部に描かれたカフェの情景は、遠景の街並みと一緒に激しい凸凹のリズムを形作って、もはやモチーフが見分け難いくらいだ。厚塗りのコタボとは対照的なのがギアマンで、こちらは顕著に薄塗りの画家である。「ギアマンの絵を見た時には新しい印象派だと思いました。古い印象派ではなくて新しい印象派。彼は色ではなくて光を描いているんです。その点、フランス人はやはり特有の感覚を持っています。日本人の場合、『今日はお天気ですね』とは言っても、『今日は光が綺麗ですね』とは言わないでしょう。ところがフランスでは誰もがこれを口にする。魚屋のおばさんでも、八百屋のおじさんでも」

扱いにもフランス人らしさがあると爲永氏は言う。たとえば《二つのバイオリンのある静物》(3)なら、バイオリンと花瓶を二つずつ組合わせているあたり、日本人画家ならまず持っていない構図感覚だ、と。爲永氏とコタボ、ギアマンの出会いはいは1960年前後に遡る。日本のメディアや美術評論家が、フランス絵画といえは抽象一辺倒になっていた時期、それに対する反発もあって新しい具象表現を探す中で出会った画家たちだ。朴訥な田舎のフランス人だったコタボに対して、すらりと背が高く知的でお洒落なギアマン。画風も人柄も対照的ながら、じつはこの2人、仲が良かった。ある時期以降、それぞれ南仏カンヌの近くに居を定めていたこともあって、爲永夫妻がフランスに行ったおりに一緒に食事をするかもしれないといったか。今回の4人展では、この2人の個性の差異と、差異ゆえに照らし出されるフランス的なものの普遍性にも目を向けてみたい。



1 アンドレ・コタボ《赤いバラのブーケ》
油彩、カンヴァス 114×146cm
2 アンドレ・コタボ《カフェ・ロトンド》
油彩、カンヴァス 89×146cm



3 ポール・ギアマン《二つのバイオリンのある静物》
油彩、カンヴァス 81×100cm
4 ポール・ギアマン《霧のベニス》
油彩、カンヴァス 65×92cm

Exhibition 画廊と共に歩んだ4人展 4月27日～6月16日 ▶ ギャルリーためなが

エコール・ド・パリを中心とした近現代のヨーロッパ絵画を紹介する画廊として時を刻んできたギャルリーためながの、開廊50周年記念展。創業以来まさに画廊と共に歩み、現代具象絵画を代表する画家となったコタボ、ギアマン、ワズバッシュ、フサ口の4人の仕事を、約40点の作品で振り返る。

住所 ● 東京都中央区銀座7-5-4
電話 ● 03-3573-5368
開廊時間 ● 10:00～19:00
(日祝は11:00～17:00)
アクセス ● 東京メトロ「銀座」駅、JRおよび東京メトロ「新橋」駅より徒歩5分
URL ● www.tamenaga.com

カンヌ近郊のレストランで昼食。
右からギアマン、コタボ、爲永氏。

